



日中民族舞踊交流会 跳竹鈴（傣族舞蹈）

雲南省舞踏家協会を迎えての 日中民族舞踊交流会

(財) 黛民族舞踊文化財団

理事長 犬丸 直

中国雲南省舞踏家協会第6次訪日代表団を迎えての日中民族舞踊交流会が、去る3月21日から29日まで行われて、大きな成功をおさめました。もとよりこの交流会は、黛節子前理事長の残された貴重な遺産の一つに基づくものです。当財団が法人化される前年、昭和60年に節子先生が中国舞踏家協会雲南分会の招請により雲南省を訪問し、交流舞踊会に出演するとともに少数民族舞踊の研究、取材をされたことに、この交流会は端を発します。爾来中国舞踏団の来日は今回で6回を数えます。そしてその間に黛舞踊団からもたびたび雲南へ人が派遣され、交流を深めてきたのでした。今回の訪日代表団長の劉金吾女史からは、亡き節子先生を偲ぶおもいが懇に語られました。また他の団員たち相互の間にも誠に親密な友情が生まれています。

このたびの交流会では9日間のびっしり詰った日程で、日中の民族舞踊の相互公演や公開レッスン、シンポジウムが行われました。草月ホール、学習院大学百周年記念会館

および黛アート・サロンと、東京における公演等のほか、地方においても、藤沢市労働会館、松本市の林友カナディアン・ホール、および群馬県の新田町文化会館で行なわれました。

中国の舞踏家たちのすぐれた芸能力と熱心な演技、その中に秘められた奥深い民族的伝統に心から感銘しました。私の素人考えですが、中国舞踊の躍動的な動きと日本舞踊のしっとりとした動きとは、ちょっと見ると大変異っていますが、よく見ているうちに、民族芸能に特有な、心の奥に訴えかける感動的なものには共通するところがあると感知されてきます。また節子先生のかねてのお望みどおり、東巴の儀式の踊りを、遠路わざわざ来訪された御年寄りの二人の方に演じていたとき、木版画の実物を目のあたりにし得たのも、有難いことでした。

黛舞踊団の団員は当然ながら、特別出演の方々、スタッフの方々はじめ参加し御援助下さった各方面の多くの方々に篤く御礼申し上げます。

黛 節子を偲ぶ会



“黛節子を偲ぶ会”に花念仏を踊る舞踊団員

平成8年10月16日黛節子前理事長の一周忌御命日の日、黛アートサロンに於いて「黛節子を偲ぶ会」を執り行いました。

思い出をお話し頂いた諸先生方の御挨拶を、御挨拶順にここに掲載させていただきます。

日本芸術院 院長
日本舞踊協会 会長
黛民族舞踊文化財団 理事長

犬丸 直

はからずも黛民族舞踊文化財団の理事長をおおせつかりました犬丸でございます。早くももう先生が亡くなられてから一周忌を迎えるわけでございますが、皆様たいへん御多用の中にもかかわりませずたくさんの方が御参列いただきまして本当にありがとうございます。これも黛先生の、数々の御遺産がございますけれども、この幅の広い人脈、これもひとつの御遺産であろうと思います。その御遺産を受け継いで、先生の御意志をこれからも発展させていくというのが私ども財団に課せられた仕事でございます。わたしは、はからずも理事長をお引き受けいたしましたけれども、節子先生のすばらしい情熱、才能、それから努力家であらせられた黛先生、そういう資質をまったく持ちあわせておりませんけれども、幸いにして常務理事の大野さん、それからその他の理事の方々、舞踊団の方々、皆さんたい



犬丸 直理事長

へん一致団結して先生の御意志をさらに展開していくために、さまざまな企画をたてておられます。ほどなくその成果があらわれてくるとは思いますけれども、各方面で今まで

黛節子先生を支えてこられました皆様方も今後ともひとつ節子先生に対してしていただいたと同じような御声援、御指導、あるいは御協力をこれからも切にお願い申し上げたいと思います。日本の民族芸能というものは現在、あらゆる方面から、世界でも注目されております。近くまた中国との交流、節子先生がずっと続けておられた交流をまた再開する予定でございます。またお聞きおよびとも思いますけれども、4年後、この次のオリンピックの年には、今年

オランダでありました世界民族芸能大会というのが今度は日本でやるという企画もございます。たいへん大きな目標もございますので、その企画の中にこの黛舞踊団も参画して、そして黛舞踊団自身の発展の機会にもいたしたいと存じております。いろいろなことがございますが、ひとつこれからもどうぞよろしくお願い申し上げます。非常に簡単でございますけれども初めのごあいさつに変える次第でございます。重ねて本日の御参会ありがとうございます。

三菱地所株式会社 相談役
黛民族舞踊文化財団 理事

中田 乙一

ただいま御紹介賜りました中田と申します。どうもお見受けしますと黛先生と私の時と比べますと、はるかに縁の深い、ご立派な方がおそろいでございますが、昨日急に、2、3分何かしゃべるようにということでございます。他のことと違まして、こういう場面で名指しがあったのをお断りするの、亡き黛先生にはたいへん失礼であるという思いが先立ちまして、お引き受けしたわけでございますが、私はあんまり先生と深い交友がありませんで、今思い出しますと、まあ古いというよく友達のことを古い仲ということがございますが、先程御紹介ありましたように、私は三菱地所の、今から30年くらいたつと思いますが、総務部長をしておりまして、三菱の品川に岩崎さんがつくった迎賓館がございまして、開東閣というんでございますが、お出ましになった方もあると思いますが、在日大使の方々をお呼びして交歓の場を持とうということがございまして、広い庭がございまして、そこで何かお客さんに喜んでいただくようなことがないかなと。そこで結局、黛先生に御登場いただきまして、野外の急ごしらえの舞台をつくりまして黛舞踊団の15、6名のお弟子さんをお連れになって踊りを踊っていただいたのでございます。いうなればそれがその後も2、3度御登場いただいたと思いますが、その窓口の役目を総務部長役でございます私が用を足していたという、そういう因縁でございます。ところが財団をつくるということで先生もその事を覚えておられまして、会社へ来られましてぜひ理事に名を連ねなさいという要請がございましたものでそういうような御恩がございまして何かよくわからないのでございますがお引き受けしたのが縁でございます。もう早くも1年たちました。埋葬の時もお参りしたのでございますが、本当にその時の感じはこういう若い、まだこれから、おそらく60才台だったとしますと、50にまだならないのではないかなという感じが持っていましただけに本当にびっくりしたのでございますがそうなりますと、よくある思いでございます。たいへん大事な人を亡くしたと。雲南省に2、3度親善の目的でお



中田乙一理事

出ましになったようでございますけれども、男性でもできないような難儀な仕事も、国家的にたいへん大事なことだという意識だったと思いますけれども、そういうこともくり広げられまして、国際的な場でも大きな抱負、経綸を持っておられた方だとその当時から感じていたわけでございますが、1年経ってこういう大勢の方が御参集いただいたのを拝見しまして、先生の人間的な深さといえますか、心といえますか、本当に立派な先生を失ったのは、残念なことに思っているわけでございます。どうも私、そこまで会話したような気もしますが、黛財団というものをつくられた時からの行動という、この財団をもっともっと舞踊を通じて次元の高い活躍をしたいという、そういう願望が非常に強かったのではないかなという印象を持ちました。その時の様子を見ていますと、財団というもののひとつの性格上当然といえば当然かも知れませんが、大変大きな広い願望を持っておられたというふうに感じておりました。今日、一周忌を迎えまして、このように大勢の方が御参会いただいたのも、もっともっと先生を尊敬するというか、なつかしむというか、底辺が大変広いということが、さすがは先生の業績が非常に大きかったということを思うべきでございます。私、話がへたなもので非常に長話になってしま

いましたが、御参会の皆様も黛財団というものをもっともって先生が思ったような方向で、御関心をもっていただいで格段の御協力をいただければ先生も本当に喜ばれると思います。私もいわれれば出来ることはいたすつもりでございしますが、今日の集まりはそういうことを先生の遺影の前で、日頃感じていたこととございしますので申し上げます。私もお願いする立場ではございませんが、犬丸理事長の仰せに従いまして一臂の力を注ぎたいものだなという感じを

抱いている訳でございます。写真も笑顔で、仏様という感じがしないのでございますけれども、おそらく、私も特別お酒を飲み交わしたこともございせんからあんまり人柄を存じ上げませんが、大変にぎやかなことが好きな先生だったと思いますので、これからごちそうもたくさんあるようございしますから遠慮なく頂戴したいと思います。へたな話でございますけれども、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

扇屋ジャスコ株式会社 取締役・相談役
黛民族舞踊文化財団 理事

安田 敬一

ご紹介いただきました安田でございます。ただいま犬丸先生のお言葉と、また合わせまして中田先生のお言葉、感慨深くうかがってここに上がった次第でございます。私も黛先生にお目にかかってもう三十年以上になります。先生はいつも心に華を持った方でいらっしゃいまして、すばらしいお気持ちと華麗な踊りをいつも日本各地で、またアジア各国で披露されておられました。

中国の雲南省などにも何度もいらっしゃり、雲南省の少数民族の踊りの先生方を日本にお呼びになるなど、心の底から民族の踊りを大事にされておられました。お亡くなりになった年も、ある日、突然電話がございまして、いま雲南省の方がみえているから一緒に食事をしようとお誘いがありました。その時も雲南省の方々を、日本民族を代表して接待しているような心のこもった遇し方をされておりました。こうした先生のかくれたご活躍は、今後の日中文化交流にも大きく役立つと信じます。

さきほど犬丸先生から世界の舞踊会議のお話がございましたけれども、黛先生は世界の民族舞踊連盟の理事にもなっておられ、その理事長が、日本にいられた時もわざわざ御紹介して下さり、これからは世界の民族舞踊のためにも貢献していきたいと抱負を述べておられました。今日は先生に御縁のある方ばかりのお集まりでございまして、皆様同じお気持ちだろうと存じます。

当財団が立派な理事長さまのもとに、大野常務理事さん、そしてお弟子さんの方々が黛先生の民族舞踊の精神を継がれて、ますます日本文化のために活躍されることを心から期待するものでございます。本当に、先生にはもっともって長生きされ、ご活躍していただきたかったと残念でなり



安田敬一理事

ません。今日は中田先生のお言葉にもありましたように、いつもあのお正月の七草の宴でお酒をいただきながら、黛先生の遺徳をしのび、一刻をすごしたいと思います。つつしんで黛節子先生の御冥福と、今宵のこの宴を先生にも天上からご覧いただくように祈りつつ、御挨拶を申し上げる次第でございます。本当に今日はありがとうございました。

献 杯

日本音楽著作権協会 理事長

黛民族舞踊文化財団 理事

加戸 守行

御紹介いただきました加戸でございます。黛先生とのおつきあいは皆様方よりはるかに短うございまして、12年前でございますか、当財団の設立のお話にお見えになった時でございます、自分の財産をなげうって財団をつくって民族舞踊をひろめたいと、純粋なお気持ちに打たれた記憶がございます。今生みの親という言葉がございましてたいへん過言な言葉でございますけれども、それ以来すばらしい黛先生との御厚誼をいただきました。ちょうど亡くなられたのが昨年の10月16日で実は私の妹の誕生日でございます、振り返ってみると、年は黛先生の方が上でございましたけれども、私とのお付き合いは何か私の妹のような気がいたしておりまして、不思議な巡り合わせだなと思っております。この1年間経ってみますと何か心に欠けたような気がします。さきほど話の出ました七草の宴のお粥も食べられませんでしたし、今の写真を、大野さんに何年前の写真ですかと聞いたら5年前というのでびっくりしました。ぱっと見たときは20代の写真のような若々しい美しいお顔、それからすばらしい踊りも見れませんでしたし、いつも甘えたような声でのお話もお電話もいただけなかったし、水茎の跡うるわしいお手紙も頂戴できなかった、そういうさびしさを感じております。亡くなられたときも申し上げたのですけれども六代目尾上菊五郎の辞世の句に

まだたらぬ 踊り踊りて あの世まで

と、多分黛先生もそんなお気持ちでこの世を去られたのかな、多分今、蓮のうてなの上で踊っていられるのではない



加戸守行理事

かな、この十数年のお付き合いを通じまして黛先生の民族舞踊にかけるひたむきなひたすらな夢を追いつけられたというのが私の強い印象でございます。それでは諸先輩あまたいる中で、たいへん恐縮でございます、僭越でございますが御指名でございますので献杯の音頭をとらせていただきたいと思います。

蓮のうてなの上で踊られているでありましょう黛先生の心の平安をお祈りし、そしてすばらしいお弟子さんたちが犬丸理事長を中心といたしまして黛民族舞踊文化財団の将来の発展を心から祈念し、そして御参会の皆様方の御健勝を祈念いたしまして杯をあげたいと思います。

献 杯！



元ブラジル大使
伊達 邦美

ゆかりの方々のお話の後でございますのでどうしようかなと、とつおいつしておりますが、司会の方のサジェスションもございますし、お見掛けいたしましたところ、もうそろそろ娘時代の藤間節子さんという方との何年かのお付き合いをしたことのある者もそうそうはいなくなったかと思えます。かくかくたる御業績とともに風のごとく逝っておしまいになったまだまだ若い節子さんではございましたけれども、私がお会いしたのは、そろそろ大東亜戦争がきなくさいような時期から終戦に近い何年かでございます。ちょうど、まさにこの赤坂田町、ここだろうと思うんでございますけれど、おかあさんと二人で住んでいらっしゃる御自宅がありました。私の両親もお親しくしていたのですが、そこにたいへんおきょうなおじょうさんがいる、おもしろい人だからとか言って私の両親が私と弟とをつれていってくれたのが最初の出合いだったと思います。ちょうどおかあさんが、節子さんが藤間の名取りになられた前後でおじょうさんかわいさにすてきなお稽古舞台をここにお作りになられまして、これもお母さんの御力かと思えますけれども、さきほどお話のございました、当時踊りの神様だと思われておりました六代目菊五郎からおくられた「芸」という一字の色紙を額に入れて、そのお稽古舞台のらんまに飾って、親しい方と呼んでお嬢さまの名取りの芸を披露なさいました。何を踊られたかわたくしも定かにはおぼえないのですが、所詮それは普通の裕福な下町のお嬢さんの手踊りだったろうと思いました。その後いろいろ家族ぐるみのお付き合いの間に、このお嬢さんはたいへんな一途な思い込みの激しい人だなということを経験いたしました。まだ昨日のこのように覚えてもおりますことを一つお聞き取り願って、大きく舞踊界の一角に業績を残されました節子さんの若き日の「せんだんは双葉」のようなエピソードと思っていただけだとおもいます。そのひとつは踊りをなされたのはお小さいときから非常にせんびょう質で、お弱かったものだからお母さんが何かやらなきゃいけないというので踊りをなされたようにうかがっております。そしてめでたく踊りは藤間の名取りにおなりになったわけですが、従って時々戦前の歌舞伎座に我々もご一緒したのでございますけれども六代目の所作がでます前は、お母さんと二人来ておられましてお母さんは普通ですが、なんとなく節子さんは幕合からそわそわなさしまして、いよいよ析が入って幕が上がろうとすると、椅子席へ上がって正座をしまして、幕が開くのを待っています。ともかく踊りをやるからにはこの先生はもう神様なので、というのですけれども、私も大学生の頃で、ちょっとまだ少しは照れるようなところがあったものですから、当時でもよほど御



伊達邦美氏

年配の方でないと椅子席にお座りになって御覧になるというようなお客さんはおられませんので、今にして思えばたいへん恥ずかしい思いをしました。しかし、そのうちにいろいろお付き合いしておりますと、なかなかの文学少女で、知的でございましてね、いろいろな議論をぶつけてこられるんですね。我々、弟と二人でたじたじなんですけれども、いつまでも日本舞踊もこういうことではいけない、なんていうことから私がどうしても日本の踊りで手にかけてみたいと思っているもの、例えば高村光太郎の“千恵子抄”であるとか、白樺派の方々の御作品や堀辰雄のものなど、時の経つのを忘れて、「そんなことはできやしないよ」というような話をしたことをよく覚えております。その私も役所に職を奉じまして、外国勤務も長く御無沙汰がちに経過してしまいました。今にして思えば、節子さんの晩年に近かったのだらうと思いますが、時にお逢いすれば昔を思い出しながら憎まれ口をきいたりしたのですが、たいへん申し訳ないことだとしみじみ今にして思います。しかし、あの頃のああいう、もう思ったらば千万人といえどもではございませんけれども、何も怖い人はないというあのお嬢さん、それから舞台に立っただけでさきほど来のお言葉のようにゾクッとするような花がありました。踊りの善し悪しは別として、あの天賦のものも節子さんのものですし、確かにあのころの、娘みたいな節子さんとあんまり違わないお写真を拝見いたしましたのでわずかのお酒で微薫を帯びていろいろと駄弁を申し連らねました。申すまでもなく、これからの黛財団はこれ以上ないすてきな理事長他、皆々様のお支えで、節子さんが天上で、ああよくやっているなという、艶然とほほえんでおられるところを忍びながら、なつかしさのあまりの長話を聞いていただきました。ありがとうございました。

元ベルギー大使
常盤大学教授
加藤 淳平

大先輩の伊達大使のすぐ後でございまして、黛先生とは伊達大使が40年来のお付き合いですが、わたくしは10年、15年か20年程度のお付き合いでございまして、伊達大使のような古いエピソードなどは何も存じませんけれども、ただ、最後に、最後と申しましてそんな最近のことではありませんが、舞踊の国際交流にひたむきな情熱をかけておられた、そういうお姿にわたくしも非常に感動いたしました。いろいろな面でお付き合いをさせていただきました。わたくしども外交官という職業を選んだ者はだいたい、外国に憧れ、外国のこと、特に欧米のことを勉強し、そして欧米に行きたいというようなところから外交活動に入った者が多いわけですが、年とともにだんだんだんだん先祖返り、日本返りをして参りまして、わたくしが黛先生とお知り合いになったころは丁度わたくし自身そういう時期にあたっておりましたので、いろいろと日本舞踊のこと、そして踊りの基本を教えてくださいました。そして特に最後の時期に日本の文化のルーツが雲南省にあるというお考えのもとに雲南省との種々様々な交流をほとんど自らのイニシアティブでやっておられる、わたくしも何等かの形で、時々御協力申し上げることができたことは、今考えてもたいへん嬉しい思い出でございます。その頃、いつも1月にはここで七草の催しもございましたし、それから時々、お手紙をいただいたり、お電話をいただいたりしていろいろなことを教えていただいた、そういうことに非常に



加藤淳平氏

懐かしい思いがございます。さきほどから黛先生、天に思い出になるというお話でございましたけれども、わたくしはなんとなく、天という感じがせずなにかその辺をさまよっておられるのではないかと、あのにこやかな顔でそのあたりにおられるのではないかと感じるわけでございます。先程、犬丸理事長のお話では、黛先生の御遺志を継いで、黛舞踊団、それから黛民族舞踊文化財団の活動を活発化させようとしておられるということでございますので、ぜひ、御遺志がそのような形で生きて、舞踊の面の国際交流、舞踊団、そして財団が十分な活動をされることをお祈りしてわたくしのご挨拶とさせていただきます。

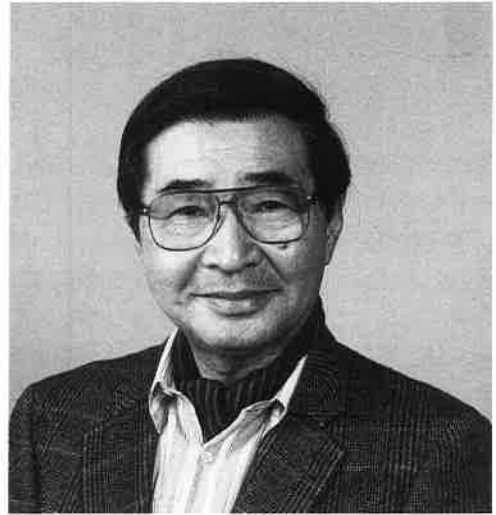


花念仏

日本民族芸能国際交流協会理事長
実践女子大学教授
黛民族舞踊文化財団 理事

三隅 治雄

わたくしにとりまして黛先生というのは今日本に御霊前にお詫びを申し上げると、写真を拝見しておりましてわたくしが本当に申し訳ない三隅であったということで今もなにか、写真がまともに拝見できない気持ちであります。と申しますのは御生前から、わたくし、いろいろな会合でお誘いを受けたり、あるいは相談を受けたりするんですけどもなかなか先生と巡り合うというか、こちらが巡り合いたくないんじゃないかと、会えなかったんでございます。でもよく電話だけで、わたくしのことを冷たい、冷たいとおっしゃいました。で、相談はいろいろしてくださったのですが、わたくしがお目にかかって御相談に乗るということがついぞなかったのが本当に申し訳ないと思います。ただ、とにかく先生はわたくしを冷たい、冷たいとおっしゃるのですが、あの先生は熱過ぎまして、わたくしを見つめている目だけでも、なにか燃えてくるという感じで、わたくしが燃えたらどうなることかと思うのでございますけれども、やはり何といえますか、一徹に思いつめるというようなことについて、よく振り返ってみると、芸能、いや舞踊の原点を常に常に求めて、追跡していらっしゃる。わたくしが相談を受けたのは、沖縄の踊りを今学んでいる、沖縄の踊りをどこまでやっていくか、とことんまでやっていかなくてはいけない、腰の扱いがあなたはいつも日本人、日本の踊り以上にでないのではないかと沖縄の先生に言わ



三隅治雄理事

れた、そうなるとその沖縄の踊りというのはなんだととことん追いつめていく。そして次に今度出雲の阿国というものを考えてみたい。じゃ阿国の踊りの念仏踊りというのは一体何だ。今も拝見しておりましたが本当によくあの時代の踊りの感じというものをよくつかみこんでいらっしゃいます。でもあの先生にとりましてはもう一つ奥のものを、奥のものを追跡していく。その追跡していく時にわたくしどもは相談を受けるのでございますがなかなか十分にお答えする力もこちらにございません。そして今度は巫女でございました。巫女、つまりこの巫女舞というもの



は日本の踊りの原点でございます。原点、それから雲南省の少数民族でございます。そこには日本人の民族のふるさとが雲南にあるのではないかと。というようなことをひとつひとつこのキーワードで拾っていきますと、黛先生はこの踊りそのものの原点、日本の踊りというものの一番みなもとをみずから実感し、体験し、そしてそれを今度舞台で取り上げて、そして新しい時代の民族舞踊を作りたいというお考えであったろうかと思えます。そういうことにおいてわたくしがお手伝いできなかったということを本当に申し訳なかったと思えます。けれども、今まで蓄積されたものがこれからどのようにそれから再創造というものにつな

っていくかというのは、これから残されたお弟子さんたちや、あるいは考えてみればわたくしどものある責任ではないかと、そんなことも考えますので、御霊前に改めてお詫びいたしまして、今後、何等かの形で、冷たいわたくしが燃えるわたくしになってみたいと思うので、これもどうも口の上だけではないかなと、そういう不安がするのでございますけれども、でもそのように頑張れよ！というまなざしがあの先生のあの大きな大きな目からなにか感じとれました。これからまたひとつ、この財団の方の仕事で多少なりとお手伝いさせていただきたいと思えます。黛先生、本当に申し訳ございません。ありがとうございました。

松竹パフォーマンス社長
寺川 知男

御紹介いただきました松竹の寺川でございます。わたくしこの場所には思い出がいっぱいつまっております。と申しますのは確か昭和27、8年かもしれませんはまだ藤間節子さんの頃にリサイタルをなさしまして、その時にわたくしが申し込んだのか呼ばれたのか覚えてはおりませんがインタビューに訪ねております。ご自宅の二階や、廊下から見渡しますとまだ赤坂のこのへんは視線を遮るものがない、焼け野原に近いような状態であったと思えます。さっき伊達大使がおっしゃいましたように少しおきやんで、しかし聡明でとても魅力的な方で、わたくしは何回かお伺いして2時間くらいはお互いに芝居や踊りの話をしていたのではないかと思います。それからこの黛スタジオができたのは何年前か忘れましたが、芝居の稽古というのは、まあ歌舞伎なんかは短い稽古でありますけれども、長い一月以上の稽古になりますと稽古場を探すのがたいへんです。今でこそ森下のベニサンスタジオとかがありますけれども松竹の畳の稽古場では足りなくて、稽古場を探しておりましたら黛さんのこのスタジオができて、ぜひ稽古場で使わせていただきたいということで、お弟子さんでここを管理していらっしゃる平野さんなんかにご厄介になりましてここで数々の名優が稽古をいたしました。尾上松緑さんや杉村春子さんや、また丸山明宏時代的美輪明宏さんや大竹しのぶさんやら、坂東玉三郎さんやら、もう数え切れない人達がここで稽古をして名作を生み出しました。黛節子さんのおかげで日本の演劇界も非常にプラスになったと思って、わたくしの演劇生活においてもこの稽古場もとても懐かしくて、さっきからここ、天井から下までずっと眺めておりました。黛民族舞踊団、先生の遺志を継いで、ぜひこれからもうんとうんと活躍していただきたいと思えます。どうもありがとうございました。



寺川知男氏



住吉大社 御田植祭り

「住吉踊り」取材記

今回の取材は亡き節子先生の果たせなかった取材の一つでした。黛節子先生の作品集の中に「願人坊主」「かっぱれ」等があります。

これら作品の元の芸能は、本来住吉踊りの系譜といわれ、願人坊主そのものが大阪の住吉大社の社僧の真似から始まったともいわれています。その住吉大社に伝わる「住吉踊り」は、神功皇后が三韓から帰国のときに、この地元の人によって踊り始められたとも言い伝えられていました。

節子先生は巫女の踊りの研究の一端として、神功皇后の伝説に強い関心を抱いておられ、それ故この「住吉踊り」も、機会があれば取材したいと考えておられました。

先生の御遺志を継ぐべく、大野常務理事、黛智英、黛莉香、藤原明人の四名で平成8年6月14日、住吉大社『御田植神事』に参加し取材を果たしました。

松田艶子前宮司夫人のお世話のお蔭で、我々取材班は『御田植神事』の行事を全て拝見出来るメインの席で取材することが出来ました。様々な行事の中で、目を引いたのは八乙女の装束。節子先生が写真を手もとに置いておられたお気持ちがわかる優美なシルエットでした。

その他少年少女による棒打ち合戦や、住吉踊りには素朴ながら、最初に述べた「願人坊主」等が影響を受けた原型を感じさせるものがありました。

しかし一方では、ここでも周辺の都市化の影響で、今まで神事として継承されていた行事が、少しずつではあっても形骸化していくのではないかという懸念を抱いたのも事実です。



『中国雲南省舞踏家協会第6次訪日代表团』交流の記録



巴烏独奏（^{ハニ}哈尼族民間楽器）

中国雲南省舞踏家協会 訪日代表团交流会

当財団は過去10年間、中国雲南省舞踏家協会と提携し、隔年ごとに両国の民族舞踊交流の会を続けてまいりましたが、黛節子前理事長の逝去に伴い事業を一時停止せざるを得ませんでした。

一年間の空白期間が出来ましたが、民族舞踊に関する国際交流事業の拡充は、前理事長の悲願でもあり、且つ又中国側からも友好関係の維持継続を強く要請されていたことでもあり、本年3月20日より3月30日の間、中国雲南省舞踏家協会劉金吾副主席を団長とする、中国雲南省舞踏家協会訪日代表团一行8名を招聘し、東京をはじめ地方各地の日中友好協会と共催して『日中民族舞踊交流会』並びに公開レッスン等を開催することが出来ました。

特に今回は、黛節子先生亡きあと先生の作品を絶やすことなく継承していくため、先生の薫陶を受けたお弟子さん達により、先生の作品のいくつかを取り上げ交流プログラムを組みました。

中国の少数民族舞踊の珍しさもさることながら、黛節子先生の作品にはじめて接したという方も多く「日本にも、このように素晴らしい踊りがあったのを知り感激しました」というアンケートを多数頂き、亡き先生に最大の御供養が出来たという思いです。

又、今回は北海道から四宅豊次郎氏を迎えて、アイヌ古式舞踊との交流も行いました。

中国側のプログラムで特に注目されたのは^{ナシ}納西族の^{ドン}『東

巴舞踏』でした。これは黛節子先生が、是非日本に招聘したいとおっしゃっていたにもかかわらず、生前遂に果たすことが出来なかったものでした。

先生は「踊りの原点は祈りよ」とおっしゃって、巫女の踊りの系譜を研究課題とされておられました。たまたま中国雲南省に東巴教なるシャーマンの宗教があることを知り、その踊りを是非日本に呼びたいと考えられたわけです。しかし、辺鄙な場所であり、殆ど村の外に出たことない方達なので、中々実現出来ませんでした。今回やっと劉先生方の御尽力で訪日を実現したわけです。



左より大野常務理事・劉常務副主席・犬丸理事長

【訪日代表团メンバー・リスト】

団長 劉金吾 雲南省舞蹈家協会常務副主席
 秘書長 張亜錦 雲南省舞蹈家協会副秘書長
 団員 和文貞 東巴舞蹈家
 団員 和 明 東巴舞蹈家
 団員 殷宏光 雲南芸術学院舞蹈学部教師
 団員 袁蓉 雲南芸術学院舞蹈学部教師
 団員 楊文苑 昆明文化局芸術処副処長
 団員 黄自新 雲南芸術学院舞蹈学部教師

《上演プログラム》

1. 団場（雲南花灯歌舞）

花灯とは雲南省漢族民間の歌舞。春節を祝う際、通常広場等で演じられる。「団場」は、最初に必ず踊るプログラムで、この賑やかな曲を聞きつけて人々は集まってくる。

2. 丁巴什羅（^{ナシ}納西族東巴舞蹈）

東巴（トンパ）踊りは納西族東巴教の祭壇上で踊られる踊りで、この踊りは東巴教の元祖が生まれる時や、歩きを覚える時などの情景を表現したもの。

3. 転花帽（^{ヤオ}瑤族舞蹈）

瑤族の娘は高々と結った髻の上にクルクル回る花帽子をかぶり、これを回しながら踊る、非常にチャームな踊り。



^{ナシ}納西族東巴舞蹈



^{ナシ}納西族東巴舞蹈

4. 版納三色（^{タイ}傣族舞蹈）

西双版纳（シーサンパンナ）の美しさを表現した踊り。

5. 巴烏独奏（^{ハニ}哈尼族民間楽器）

哈尼族は雲南省哀牢山地区で生活する民族で、素朴だが、非常に美しいメロディーを奏でる。

6. 八角鼓和霸王鞭（^ベ白族舞蹈）

白族の伝統的民族舞蹈。祭祀活動の際八角鼓（八角形のタンバリンに似た打楽器）で霸王鞭を踊る。

7. 跳豪猪（^{ナシ}納西族東巴舞蹈）

豪猪は西方大神の乗物といわれ、広く伝わっている塔城地区の踊りとは異なった風格と特色がある。

8. 姑娘的披毡（^彝彝族舞蹈）

雲南省楚雄彝族自治州若い男女の、生活風俗習慣に基づいて作られた踊り。

9. 跳竹鈴（^リ傈僳族舞蹈）

娘達が竹で作った鈴を、腰につけて踊る。

10. 弓箭舞（^{ナシ}納西族東巴舞蹈）

自由奔放な踊りで、悪魔を鎮め追い払う尤瑪戦神の踊り。

11. 木鼓舞（^僳佤族舞蹈）

かつて首狩りの習俗があった時、踊られたといわれる大太鼓による激しい奔放な踊り。

《一行のスケジュール》

1997年

3月20日

20時、香港発のキャセイ航空にて成田着。国内でも都会へ出た経験のない東巴の人達は、さすがに疲れた様子。赤坂黨アートサロンに直行。夕食と打ち合わせ。

3月21日

午前中、中国大使館へ表敬訪問。大使は御都合悪く、代って趙宝智参事官と歓談。

午後は草月ホールでリハーサル。18時犬丸直理事長の御挨拶で本番開始。盛況の内に公演無事終了。

3月22日

この日は湘南日中友好協会との共催。午前中ニエアル記念碑に立ち寄り、会場の藤沢労働会館に向かう。交流会は雨天にもかかわらず、立ち見も出る超満員の盛況。

3月23日

松本日中友好協会（穂苅甲子男会長）との共催交流会の為あずさ55号で松本に向かう。18時より林友カナディアンホールにて、松本日中友好協会による歓迎会と、地元菊水流の方々と交流舞踊を行う。

3月24日

休養日となり、穂苅会長の御厚意で松本城見学をはじめ市内散策の後、穂高ビュウホテルに宿泊。温泉を体験。

3月25日

朝、松本を立ち帰京。午後文化庁に吉田茂文化庁長官を



団場（雲南花灯歌舞）

表敬訪問。その後ディズニーランドに向かう。

3月26日

黨アートサロンに於ける公開レッスンの予定だったが、草月ホールにお出でになれなかった方々が大勢お見えになるというので、草月ホールでのプログラムを組み込む。四宅さん一行アイヌの方達も参加し交流公開レッスン。

3月27日

諏訪春雄先生が主宰される学習院大学東洋文化研究所アジア文化研究プロジェクトとの共催交流会。大学の先生方が多く、強い反響がある。交歓パーティーの後、一行は買物に出る。

3月28日

浅草発の東武線両毛号で群馬県太田に向かう。太田からマイクロバスで新田町へ。新しく出来た総合文化施設の体育館で先ず、地元のフォークダンス・サークルの方や木崎音頭保存会の方達と公開レッスンを行う。中国側は「転花帽」日本側は「木崎音頭」で交換レッスン。

その後、新田義貞ゆかりの場所を見学。夜はプラザ・ニッタで山崎町長はじめ町の有力者の方々が集まられて歓迎会が催される。



黨民族舞踊団による 小原木



吉田茂文化庁長官を表敬訪問する
中国訪日団

3月29日

午前中リハーサル。13時から新田町文化会館エアリスホールにて本番。開演に先立ち大野常務理事より、黛民族舞踊文化財団と中国雲南省舞踏家協会との関係及び黛節子先生の作品解説等の説明がある。大盛況のうちに無事終了。直ちに帰京。夜19時より黛アートサロンでサヨナラ・パーティー。犬丸直理事長のご挨拶に始まり、お土産の交換等があり盛会のうちに終了する。

3月30日

早朝、全員無事帰国の途につく。



阿寒アイヌ民族文化保存会の皆さん
黛アート・サロンにて



趙宝智参事官と中国訪日団
中国大使館にて



湘南日中友好協会と
中国訪日団



アイヌ古式舞踊
鶴の舞



松本日中友好協会穂苅甲子男会長と訪日団



東洋文化研究所アジア文化研究プロジェクト
(学習院大学百周年記念会館にて)の諏訪春雄評議員



新田町文化会館での日中舞踊交流の公開レッスン



黛民族舞踊団による 越中おわら

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、我が国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡業公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および中国・韓国・東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し、将来は資料館を設立して一般の利用に供することを計画していま

す。また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護の元に活動していますが、これらの舞踊団との交流や、中国・韓国・東南アジア諸国の民族芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民族芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ててまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます。

《今後の活動計画》

当財団では来る1998年3月16日から1998年3月26日まで中国雲南省舞踏家協会訪日代表団を中国から招聘して以下のような日中舞踊交流を行う予定です。

- ・静岡県大井八幡宮の「藤森の田遊び」取材
- ・日中舞踊交流会(中国少数民族舞踊・日本民族舞踊・琉球舞踊)
 - 1 東京芸術劇場
 - 2 黛アートサロン
 - 3 学習院大学百周年記念会館
 - 4 群馬県新田町文化会館

当財団では民族舞踊訪中団を組織し、来る1998年4月から中国雲南省の以下の各地を訪問し、雲南省舞踏家協会及び雲南省の少数民族との民族舞踊を通じての交流を深め、日中友好の一助にしたいと考えています。

《訪問予定地》

- ・文山州(州設立40周年記念祭)
- ・大理(白族)
- ・麗江(納西族)



姑娘の披毡（彝族舞蹈）



新田町文化会館エアリスホールでの
日中舞蹈交流会



八角鼓と霸王鞭
（白族舞蹈）



草月ホールでの日中舞蹈交流会

民族舞蹈文化 NO.10

1997年6月9日発行 発行人 犬丸 直 編集人 大野 晃

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel 03-3583-3633 (代)
Fax 03-3583-3639

財団法人 黛民族舞蹈文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE MAYUZUMI BLD 4F,3-10-3,AKASAKA,MINATO-KU,TOKYO